

日本経済新聞社 創刊 150 周年記念

# ザ・ファミリー・オブ・マン写真展

人類愛と平和のビジョンを、いま再び

2026 年 8 月 12 日 (水) ～ 24 日 (月) 日本橋高島屋 S.C. 本館 8 階 ホール

主催：日本経済新聞社

特別協力：ルクセンブルク国立視聴覚センター、ルクセンブルク文化省、駐日ルクセンブルク大公国大使館

協賛：エプソン販売、Sigma

協力：アトリエマツダイラ、徳川印刷、フレームマン

後援：一般財団法人 日本カメラ財団、公益社団法人 日本写真家協会、公益社団法人 日本写真協会

アドバイザー：逢坂恵理子（国立新美術館前館長）、竹中悠美（立命館大学教授）

The selection of works is based on the exhibition *The Family of Man*, organized by Edward Steichen, former Director of the Department of Photography, and originally presented at The Museum of Modern Art, New York, from January 24 – May 8, 1955.

## 作品解説、作品リスト

### 解説：竹中悠美（立命館大学教授）

※作品リストの掲載順は、展示の順序とは必ずしも一致しません。

※撮影地、撮影者などの作品情報は、オリジナルの展示をもとに掲載しています。

1

## プロローグ

「ザ・ファミリー・オブ・マン（人間家族）」の幕開けは、深い森の中でひとり静かに眠る幼い子ども。

カリフォルニアの手つかずの自然をとおして宇宙や人間の存在を探るような、詩的な風景写真で知られるウィン・バロックの代表作《森の中の子ども》(1951)です。この子は彼の娘だそうですが、太古の地球に奇跡のように誕生した無垢な人類を想起させます。

悠然と流れる大河を太陽が照らしている風景もバロックの作品で、タイトルは添えられた聖書の言葉と同じ《光あれ》(1951)。闇の中で光を放っているかのような球体は、ハリー・キャラハンが出産間近の妻の腹部を強いコントラストで浮かび上がらせた《エレノア》(1950頃)です。人間ひとりひとりの命は、小さな水の流れのように始まり、やがて無数の人生が交わって、人類という大河を成していく。その流れを写真とともに辿っていく旅が、ここから始まります。

| 撮影地  | 撮影者       |
|------|-----------|
| アメリカ | リック天文台    |
| アメリカ | ウィン・バロック  |
| アメリカ | ウィン・バロック  |
| アメリカ | ハリー・キャラハン |

# 恋人たち

人類が生命を紡いでこられたのは、恋人たちの運命的な出会いがあったからでしょうか？  
そう思わせるのは、パリの街角を舞台に人々のなにげない一瞬をドラマにしてしまう、ロベール・ドアノーの写真です。まなざしが交わって惹かれ合う瞬間や、恋人の肩を抱き寄せ頬にキスする瞬間、まるで魔法をかけられたように街のざわめきが止まって見えます。  
互いの気持ちを確認するように、あるいは身を焦がすような思いを抑えきれずに抱擁する恋人たちの写真は、夫婦として結ばれ、新たな家族となる婚礼へと続いていきます。  
村を挙げての賑やかな行進、《農民の婚礼》(1947)は、戦場カメラマンとして名を馳せたロバート・キャパの一枚。写真家集団マグナムを立ち上げた彼が最初の取材に選んだテーマは、東欧の農民たちの暮らしでした。同じくマグナムの一員で戦後の日本を取材したヴェルナー・ビショフは、厳かな三々九度の契りを撮影しています。彼らもカメラ越しに、戦争から解き放たれた人々の新たな門出を心から祝福していたことでしょう。

| 撮影地           | 撮影者             |
|---------------|-----------------|
| 中国            | ドミトリ・ケッセル       |
| イングランド        | ラルフ・モース         |
| フランス          | ロベール・ドアノー       |
| ニューギニア        | ローレンス・ルゲイ       |
| フランス          | ロベール・ドアノー       |
| アメリカ          | ルー・バーンスタイン      |
| アメリカ          | ロイ・デカラヴァ        |
| イタリア          | ゴットハルト・シュエ      |
| フランス          | ロベール・ドアノー       |
| アメリカ          | デイヴィッド・リンドン     |
| アメリカ          | ウェイン・ミラー        |
| アメリカ          | ルイス・フォア         |
| アメリカ          | エルンスト・ハース       |
| アメリカ          | ルイス・フォア         |
| チェコスロヴァキア（当時） | ロバート・キャパ        |
| メキシコ          | ウェイン・ミラー        |
| インド           | フランク・ホーヴァット     |
| スウェーデン        | ハンス・マルムベリ       |
| 日本            | ヴェルナー・ビショフ      |
| フランス          | アンリ・カルティエ＝ブレッソン |
| アメリカ          | ジェイ・テ・ウィンバーン    |

# 母と子

「私の骨の骨、私の肉の肉……」とは、アダムが自らのあばら骨から造られたエバに出会ったときに発した言葉です。人と人の根源的なつながりや一体性を表すと解釈されていて、本セクションではそれを、骨肉を分けた母と子の絆と愛情に重ね合わせています。

北極圏、コンゴの森、グアテマラの寒村、シドニーのスラム街など、厳しい環境も含めて、世界各地から集められた写真からは、肌の温もりが伝わってくるようです。そして、授乳や抱擁、おんぶや抱っここの仕方は文化によって異なっていますが、子どもを慈しみながら育む共通の営みとして示されています。

その中で、ネル・ドアが撮影した親子は、絵画的な柔らかな光と構図によるノスタルジックな写真集『母と子』(1954)からの一枚で、絵本作家のターシャ・テューダーとその息子です。素朴な暮らしと自然を愛したテューダーはアメリカの懐かしい母親像そのものでした。

| 撮影地          | 撮影者           |
|--------------|---------------|
| 北極圏          | リチャード・ハリントン   |
| シベリア         | 撮影者不詳         |
| アメリカ         | ネル・ドア         |
| アメリカ         | アーヴィング・ペン     |
| オーストラリア      | デイヴィッド・ムーア    |
| インド          | ギテル・スティード     |
| アメリカ         | ウェイン・ミラー      |
| インド          | ギテル・スティード     |
| インド          | ヴェルナー・ビショフ    |
| アメリカ         | レオン・レヴィンスタイン  |
| 日本           | 大滝栄寿          |
| グアテマラ        | リサ・ラーセン       |
| ベルギー領コンゴ（当時） | レナート・ニルソン     |
| 南アフリカ        | コンスタンス・スチュアート |
| アメリカ         | アーヴィング・ペン     |

# 遊ぶ子どもたち

子どもたちは成長とともに好奇心を世界へと広げていきます。親のそばを離れてひとりで遊び始め、さらに仲間との遊びを通して社会へと歩み出すのです。

砂漠で遊ぶ子どもたちの弾けるような跳躍の瞬間を捉えたナット・ファーブマンの写真からは、笑い声や叫び声まで聞こえてくるようです。また、よちよち歩きを始めた幼児や、隊列を組んで集団遊びを楽しむ子どもたちの間に、飛沫を上げて水に飛び込む子を真上から撮ったエドワード・スタイケンのプライベート写真が挿入され、展示のリズムにアクセントを与えています。

ユージン・ハリスの《ペルーの笛吹》(1954) は、ニューヨーク近代美術館での展示の中で繰り返し五回も登場し、写真集の表紙も飾る特別な一枚です。いたずらっぽく笛を吹く少年と、もうひとりの少年のほがらかな笑顔は、人間にとっての音楽の喜びを象徴し、展示の流れにアクセントを添えながら物語をいざなうライトモチーフの役割も持つそうです。

| 撮影地          | 撮影者             |
|--------------|-----------------|
| ベチュアナランド（当時） | ナット・ファーブマン      |
| アメリカ         | バート・グリーン        |
| オーストリア       | デヴィッド・シーモア      |
| ドイツ          | ハンネス・ローゼンベルク    |
| インド          | エリック・シュワブ       |
| アメリカ         | アルフレッド・アイゼンスタット |
| アメリカ         | エドワード・スタイケン     |
| ペルー          | ユージン・ハリス        |

# 家族

「ザ・ファミリー・オブ・マン」の核となるのが本セクションです。アメリカ、イタリア（本土とシチリア）、ボツワナ、そして日本で暮らす五家族の肖像写真が交差するように並んでいます。肌の色や文化、生活環境は異なっていますが、互いに支え合いながら大地で働き、子どもを生み育てる彼らの姿に「家族」という共同体の根源を見出すこと。それこそが、人類を一つの共同体として捉えるスタイクンの理念であり、本セクションを中心として展覧会全体を貫くメインテーマなのです。

一方で、これらの写真を見比べると、服装や住居の格差や、人々の表情の違いにも気付かされます。アメリカ人家族が余裕の笑みを見せているのは、撮影者のニーナ・リーンが被写体と打ち解けることに長けていたからでしょうか。野良仕事の手を止め、カメラを構える撮影者を見つめる日本人家族のまなざしからは何が読み取れるでしょうか。撮影者のカール・マイダンスは、1945年9月2日に戦艦ミズーリ号上でマッカーサー元帥のもと行われた日本の降伏文書調印式を記録したカメラマンでもありました。その事実をこの家族が知る由はなかったでしょう。

| 撮影地          | 撮影者         |
|--------------|-------------|
| シチリア         | ヴィト・フィオレンツァ |
| アメリカ         | ニーナ・リーン     |
| ベチュアナランド（当時） | ナット・ファーブマン  |
| 日本           | カール・マイダンス   |
| イタリア         | ロバート・キャリントン |

# 教育

人類が血縁関係を超えて育み、人から人へ、場所を超えて受け継いでいこうとするもの——それが「英知」です。「学ぶこと」「考えること」「教えること」を突き動かす力。アメリカ独立革命とフランス革命に深く関与した思想家トマス・ペインの言葉——「真実には抗しがたい性質があって、真実は現れる自由をひたすら欲求してやまない」はその核心を言い当てています。

知識には、日常生活のなかで身につくものもあれば、学校という制度のなかで教わるものもあります。得られなかった学びの機会を取り戻そうとする努力が伝わってくるのが、デイヴィッド・シーモアがクローズアップした農夫の手《文盲との戦い》(1950)です。

学生の熱気に満ちた階段教室を見上げるアルフレッド・アイゼンスタットの写真。研究室での緊張感漂うゼミの様子を静かに見下ろすオットー・ヘーゲルの写真。そこには、「学問」を伝え、さらに新たに生み出していく大学という空間が、より広く人々に開かれていく変化への期待が感じられないでしょうか。とりわけ、強い存在感を放つ女子学生たちの気迫が、その変化を際立たせています。

6

| 撮影地                      | 撮影者             |
|--------------------------|-----------------|
| アメリカ                     | アンドレアス・ファイニンガー  |
| ドイツ                      | オットー・ヘーゲル       |
| ビルマ（当時）                  | バート・ハーディ        |
| アメリカ（カリフォルニア大学放射線研究所、当時） | ナット・ファーブマン      |
| アメリカ（プリンストン高等研究所）        | エルンスト・ハース       |
| アメリカ（ペンシルバニア州アレントウン）     | ニーナ・リーン         |
| アメリカ（プリンストン高等研究所）        | アルフレッド・アイゼンスタット |
| アメリカ（プリンストン高等研究所）        | アルフレッド・アイゼンスタット |
| チェコスロヴァキア（当時）            | アルフレッド・アイゼンスタット |
| アメリカ（カリフォルニア大学）          | オットー・ヘーゲル       |
| イタリア                     | デイヴィッド・シーモア     |
| パレスチナ                    | ジョン・フィリップス      |
| インド                      | J・デ・ピエトロ        |
| ベチュアナランド（当時）             | ナット・ファーブマン      |
| イングランド                   | エスター・バブリー       |
| ポーランド                    | ローマン・ヴィシュニアック   |
| アメリカ                     | ルース・オーキン        |

# 死

人間は死すべき存在であり、死は誰にも等しく訪れます。「木の葉のうつろいにひとの生死もそっくりだ」と記したギリシアの詩人ホメロスは命の儚さを木の葉に喩え、弘法大師は生死流転の定めを「生まれ生まれ生まれ生まれて……」（『秘蔵宝鑰』）という印象的な言葉で説きました。

けれど、悲しみのなかに遺された人々は、ひたすら死者を悼み、冥福を祈らずにはいません。その様子を映した写真が並ぶなか、マシュー・ブレイディによる兵士の亡骸の写真はショッキングですが、「ザ・ファミリー・オブ・マン」で確認できる数少ない19世紀の作例として特別な意味を持ちます。アメリカ南北戦争を記録したこの写真は、戦場での死を英雄的な物語としてではなく、名もなき兵士の現実として初めて人々の前に突きつけた、写真史における重大な転機を示すもののなのです。

本セクション最後のマヌエル・アルバレス・ブラボの《新しい墓》(1933)では、片隅に咲く野菊に目を留めてください。背景の漆黒の闇と対照をなす強い光は、死者の眠る土だけでなく、この小さな生命にも降り注いでいます。

| 撮影地          | 撮影者             |
|--------------|-----------------|
| メキシコ         | ローラ・アルバレス・ブラボ   |
| インド          | アンリ・カルティエ＝ブレッソン |
| オーストリア       | ロバート・ハルミ        |
| 朝鮮半島         | マーガレット・バーク＝ホワイト |
| ドイツ          | ヴィリー・フッティヒ      |
| アメリカ（ニューヨーク） | メイ・ミリン          |
| フランス         | イジス             |
| スペイン         | レオンティ・プランスコイ    |
| アメリカ         | マシュー・ブレイディ      |
| ニューギニア       | アーノルド・マース       |
| イングランド       | 撮影者不詳           |
| イングランド       | ビル・ブランツ         |
| メキシコ         | マヌエル・アルバレス・ブラボ  |

# 正義と人権

民主的な社会参加が人間社会をより公正なものへと変えていく力。本セクションでは、裁判や選挙といった制度と討議の場での人々の姿に、その力を見出します。

各国の投票所で票を投じているのはいずれも女性たちです。女性参政権は、トルコで1934年、フランスで1944年、日本では1945年に認められました。ジョン・フロレアは、日本で初めて女性国会議員が誕生した1946年の歴史的な総選挙で、女性が投票権を行使する瞬間を撮影しました。

一段低い位置に配されたボブ・シュワルバーグの写真は、警備官を真上からスローシャッターで撮影したもの。正義や人権を維持するためには、緊張感をもって見守る必要があることを示唆しています。

アメリカでの当時の市民討論を象徴するラジオアンテナと巨大会場の隣に並ぶのはマーガレット・バーク＝ホワイต์が南アフリカのアパルトヘイトを取材中に撮影した集会や、アンリ・カルティエ＝ブレッソンがイランで撮影した野外集会の写真です。地面から立ち上がって発言する男性の姿が、正義と人権を求める民主的实践を体現しています。

8

| 撮影地   | 撮影者              |
|-------|------------------|
| フランス  | ドミトリ・ケッセル        |
| 日本    | ジョン・フロレア         |
| トルコ   | ハーマン・クライダー       |
| アメリカ  | ボブ・シュワルバーグ       |
| アメリカ  | ダン・ワイナー          |
| フランス  | ナット・ファーブマン       |
| アメリカ  | サム・フォーク          |
| イラン   | アンリ・カルティエ＝ブレッソン  |
| アメリカ  | シャーリー・バーデン       |
| アメリカ  | エドマンド・バート・ジェラード  |
| 南アフリカ | マーガレット・バーク＝ホワイต์ |

# 戦争の顔

「ザ・ファミリー・オブ・マン」がうたう人間性を踏みにじる戦争を、本セクションでは人々の顔を通して、その現実と普遍的な悲劇を浮かび上がらせてます。

三人の女性、三人の子ども、三人の男性から成る九つの顔は、言葉では言い表せないものを語っています。それらは、戦争を「出来事」として記録した写真とは異なり、人間の内面の奥深くに刻み込まれた「経験」が表情となって現れたものとして、戦争の痕跡を伝える写真なのです。

中央の男の子は、原爆投下翌日の長崎市街で山端庸介が会った生存者のひとりです。その真下に配されているのは、デイヴィッド・ダグラス・ダンカンが朝鮮戦争で密着していた前線部隊の米軍大尉の顔です。大尉の写真は、部隊の弾薬がもう尽きると報告を受けた直後に撮られました。

「出来事」としては別々の戦争が、戦禍に巻き込まれる民間人と戦闘を担う兵士という二つの現実として重なり合います。炊き出しのおにぎりを手にしたまま立ちすくむ幼い男の子は、何を見ていたのでしょうか。

| 撮影地    | 撮影者           |
|--------|---------------|
| メキシコ   | リーヴァ・ブルックス    |
| アメリカ   | ジョーン・ミラー      |
| イタリア   | エルンスト・ハース     |
| アフリカ   | ピーター・W・ハーバーリン |
| 日本（長崎） | 山端庸介          |
| 朝鮮半島   | デイヴィッド・ダンカン   |
| ポーランド  | ローマン・ヴィシュニアック |
| インドシナ  | ヴェルナー・ビショフ    |
| オーストリア | 岡本洋一          |

# 水爆実験

1952年11月1日、アメリカはマーシャル諸島で史上初の水爆実験を成功させました。この瞬間から人類は、自らの終焉を想像するだけでなく、それを現実のものとしうる存在となったのです。

ニューヨーク近代美術館での「ザ・ファミリー・オブ・マン」では、すべての写真がモノクロであるなか、暗い部屋に設置されたカラーの水爆実験写真のライトボックスがオレンジ色の閃光を放っていました。1956年3月に開幕した東京展では当初、山端庸介による焼け野原となった長崎の風景写真を背景に、先のおにぎりを持つ男の子を含む生存者たちの写真が配置されていました。

巨大なキノコ雲、閃光、焦土の中の犠牲者。いずれも「戦争の顔」セクションに添えられたラッセル＝アインシュタイン宣言(1955)からの言葉、「水爆による戦争は 人類を終焉せしめるにちがいない」が警告する「破滅のイメージ」で、私たちをそれに直面させるのが、このセクションなのです。

| 撮影地     | 撮影者   |
|---------|-------|
| マーシャル諸島 | 撮影者不詳 |

# 国際連合

国際連合（United Nations）は、二度の世界大戦を経て、1945年のサンフランシスコ会議で誕生しました。その憲章は「われら連合国の人民は」で始まるように、「人民（Peoples）」を主語に据え、平和の維持・人権の尊重・国際協力を掲げた国際機関です。

しかし、まもなく世界は冷戦状態に入り、この国連総会議場があるニューヨークの本部が完成した 1952年には、水爆実験を含む核軍拡競争が加速していました。前セクションが暗示するような破滅を回避するためには、国際的な対話と討論の場が不可欠であるという信念が、ここには託されています。

「ザ・ファミリー・オブ・マン」のクライマックスで示されたこの信念に対しては、当時から楽観主義的だという見方がありました。国際秩序の逸脱が繰り返され、国連の限界が露わになるなかで、それでもなお、こうした場にどのような役割が求められるのでしょうか。その問いはいま、私たちが向き合うべきものとなっています。

撮影地

撮影者

国際連合

マリア・ボーディ

# 子どもたち

「ザ・ファミリー・オブ・マン」の最終章を飾るのは、再び子どもたちです。

無邪気に遊ぶ子どもたちのなか、アンリ・カルティエ＝ブレッソンとチャールズ・トリーシュマンの写真では、松葉杖を突きながら、友達とはしゃぐ男の子や懸命にボールを追う後ろ姿が目に残ります。

地球上に生を受けたひとりひとりの人生という流れは、小さくとも力強く、仲間と一緒に新しい流れを生み出しながら、人類の大河へと向かっていきます。勢いよくしぶきを上げる澄んだ水の写真は、その尽きることのない生の躍動を感じさせます。

最後の一枚は、プロローグと同じく森の中の子どもです。70年代に「水俣」の問題と向き合い、人間の尊厳を訴えた W. ユージン・スミスは、沖縄戦で日本軍の砲弾によって重傷を負い、一時は写真家としての復帰も危ぶまれていました。《楽園への歩み》(1946) は、療養中に彼の子どもたちを撮った写真です。暗い森の中から、光の差す方へ歩み出るふたりの姿に、スミス自身の再起と、人類の新たな歩みへの希望が託されています。

| 撮影地    | 撮影者             |
|--------|-----------------|
| 撮影地不明  | セドリック・ライト       |
| アメリカ   | バーニー・カウハード      |
| イングランド | ルース・オーキン        |
| 日本     | 蒲生右之助           |
| スペイン   | アンリ・カルティエ＝ブレッソン |
| ジャワ    | アンリ・カルティエ＝ブレッソン |
| アメリカ   | ギータ・レンツ         |
| イングランド | リー・ミラー          |
| アメリカ   | トニ・フリッセル        |
| モロッコ   | チャールズ・トリーシュマン   |
| フランス   | エドワード・スタイケン     |
| アメリカ   | W. ユージン・スミス     |

# ルクセンブルク現代作家について

解説：クレール・ディ・フェリーチェ

(ルクセンブルク国立視聴覚センター、スタイケン・コレクション担当)

**Bruno Oliveira** ブルーノ・オリヴェイラ

*In Ore Gloria*、2021 年

ルーヴル美術館所蔵のスペイン絵画とイタリア絵画に着想を得た *In Ore Gloria* は、伝統的な絵画構図に組み込まれてきた異性愛中心の価値観を問い直すシリーズです。西洋美術の既存の物語において、LGBTQIA+の人々の生が不在とされ、あるいは誤って表象され、時に有害なステレオタイプへと還元されてきたことを問いかけます。

オリヴェイラが特に参照するのはカラヴァッジョです。その作品には、後にクィアな読み解きが可能となる要素がすでに含まれていました。オリヴェイラは古典絵画の視覚言語を現代写真へと移し替え、ルクセンブルクのLGBTQIA+コミュニティの人々を、自宅や個人的に意味のある場所で撮影します。親密な環境で撮られたイメージは、当事者の物語を可視化するとともに、従来の表象のあり方に問いを投げかけます。

ブルーノ・オリヴェイラは1993年、ポルトガルのサンフィンス生まれ。ルクセンブルクで育ち、現在もルクセンブルクを拠点に活動しています。出自や移動、多文化的な背景が、作品制作の重要な基盤となっています。

教育職を経て、2015年からブリュッセルのENSAV La Cambreで視覚芸術を学び、2020年に修士号を取得しました。ドキュメンタリー写真の影響を受けながら、現実の物語を詩的な視覚表現へと変換する制作を続けています。アイデンティティ、移民、旅、コミュニティを主なテーマとし、人や場所に宿る記憶と経験を写真にとどめます。

**Krystyna Dul** クリスティーナ・ドゥル

*Becoming*、2017年—継続中

*Becoming* は、2017年に夫のケヴェン・エリクソンとの協働として始まりました。写真家であり人生のパートナーでもある二人の親密な関係を出発点とする作品です。2020年に娘が生まれた後、ドゥルの関心は家族の変化と、三人を結びつける場へと移っていききました。

出産後の不安定な時期、ドゥルはカメラの前に立ち、自画像を撮影しました。写真は彼女にとって癒やしであると同時に、かつての自分と、母として形づくられていく新たなアイデンティティをつなぐ繊細な糸となりました。当初は最後の写真になるかもしれないと考えていたこの行為が、結果的に新たなシリーズの出発点となります。本作はパートナーシップと子育ての間にある繊細な均衡を見つめ、共に生きる生活を支えるエネルギーを写し出します。

クリスティーナ・ドゥルは、ポーランド系ルクセンブルク人のアーティスト、文化コーディネーター、インディペンデント・キュレーター。政治学とクリエイティブ写真の修士号を持ち、現在はチェコ・オパヴァのシレジア大学クリエイティブ写真研究所で博士課程に在籍しています。

彼女の作品は、アルル国際写真フェスティバルをはじめ、欧州各地で紹介されています。2016年には Resonance で Bourse CNA を受賞。Edward Steichen Award Luxembourg、MACK First Book Award、Madame Figaro Photography Prize にもノミネートされました。制作と並行して、ルクセンブルク国内外で写真展、出版物、文化プロジェクトの企画・運営にも携わっています。

## Cristina Nuñez クリスティーナ・ヌニェス

### *Higher Self*、2004 年—継続中

*Higher Self* は、クリスティーナ・ヌニェスが開発した手法「Self-Portrait Experience (SPEX)」によって制作された協働的なセルフポートレートのシリーズです。20年にわたり自身のセルフポートレートを探究してきたヌニェスは、2004年以降、他者をスタジオに招き、自らを撮影してもらう実践を始めました。

美術学校、刑務所、メンタルヘルス施設、美術館、中等学校などで行われるワークショップでは、参加者が一人でスタジオに入り、カメラの前で困難な感情や強い感情を表すよう促されます。撮影の瞬間、ヌニェスはあえて不在となり、身振りや表情が彼女の制御を離れて立ち上がる余地を残します。その後、参加者に寄り添いながら、写真を読み解き、選ぶプロセスを共有します。基準となるのは一般的な美しさや写真写りではなく、感情の複雑さや、個人の経験を超えて響く力です。

こうして生まれるポートレートは、写真、現代美術、社会的実践、心理学が交差する場に位置し、予測不能な人間的・関係的プロセスから生じます。自発的に生まれたものでありながら、その身振りや形式の中には、歴史上のイメージを想起させるものもあります。個人の感情が、より広い視覚的記憶や集合的記憶とつながりうることを示し、個人の経験と普遍的な表現形式を結びつけています。アーティストと被写体、自己と他者、芸術と生活の境界を問い直します。

1962年生まれのクリスティーナ・ヌニェスは、1988年にセルフポートレートの制作を始めました。自己療法であると同時に、創造的なプロセスを促す手段として取り組んできた実践です。2005年以降は、自伝的シリーズ Someone to Love と SPEX の国際展開を中心に活動しています。欧州、アジア、オーストラリア、北米でワークショップを実施し、2013年には映像、パフォーマンス、オンライン・プラットフォームを組み合わせた継続プロジェクト La Vie en Rose を開始しました。自らを社会的アクティビストと位置づけ

る彼女は、個人的な経験を起点に、鑑賞者が作品の中に自分自身の一面を見出すことを促します。現在はフランス北部を拠点にし、ルクセンブルクでは Art as Experience とともに活動。2020 年、英国のダービー大学で Published Works による博士号を取得しました。

## Anne Speltz & Nora Börding アン・スペルツ & ノラ・ボルディング

### *The Forgotten Stories of the “Boat Driver”*、2025 年

*The Forgotten Stories of the “Boat Driver”*は、イタリアやギリシャに到着する移民船を操縦したとされる人々が犯罪化される問題を追ったプロジェクトです。欧州連合の外部国境では、当局が誰が船を操縦したのか、あるいは誰が羅針盤を持っていたのかを特定しようとしています。急いで集められた供述と限られた法的支援をもとに、難民が密航斡旋の罪に問われ、収監される例もあります。

訴追された人々の多くは、自らも密航させられた立場にあり、強制や必要に迫られて、あるいは船上の他者を救うために舵を取っていました。本プロジェクトは、被害を受けた人々や弁護士との協働を通じ、祖国を逃れながら欧州到着後に加害者として扱われた七人の物語を伝えます。写真、証言、リサーチを組み合わせ、「冷酷な密航業者」という固定化されたイメージに異議を唱え、被告人が証人となり、国家機関が検証の対象となる対抗的なアーカイブをつくり出します。

ノラ・ボルディングとアン・スペルツは、ドイツとルクセンブルク出身のドキュメンタリー写真家です。ともにハノーファーでフォトジャーナリズムとドキュメンタリー写真を学んだ後、ベルリン、ブリュッセル、ヘント、オーフスで研鑽を積みました。

二人の実践は、長期的な協働、共感的なポートレート、広範なリサーチを通じて、社会的・政治的に繊細な問題に向き合うものです。2023年以降、イタリアとギリシャにおける移民の犯罪化を調査し、当事者一人ひとりの経験を欧州の法制度や移民政策と重ねて検証してきました。*The Forgotten Stories of the “Boat Driver”*は、Stiftung BuchkunstのYoung Book Design Award、Carles Costa Award、ルクセンブルク国立視聴覚センターからの支援など、国際的な評価を受けています。

## Marc Schroeder マーク・シュローダー

### *ORDER 7161*

1944年12月16日、スターリンは秘密指令「命令7161ss」に署名しました。ルーマニア、ハンガリー、ユーゴスラビア、ブルガリア、チェコスロバキアから、労働可能とされたドイツ系住民を強制移送する内容でした。彼らの労働は、ソ連の復興を支えるとともに、戦時中の破壊に対する賠償と位置づけられました。

強制移送された人々は計112,480人にのぼり、そのうち69,332人がルーマニア出身のドイツ人でした。多くが強制労働、厳寒、飢え、劣悪な生活環境によって命を落としました。生存者の大半は1949年後半にルーマニアへ帰還しました。

ORDER 7161で、マーク・シュローダーは40人の元被移送者を撮影し、インタビューしました。多くは1945年当時、強制移送された人々の中でも若い世代に属しており、本プロジェクトは彼らの証言を保存する最後の機会の一つとなりました。肖像、アーカイブ資料、個人の証言を組み合わせ、記憶と強制収容が残した消えないトラウマを見つめます。2021年に写真とテキストによる書籍として刊行され、2022年のParis Photo-Aperture First PhotoBook Award最終候補、2023年のGerman Photo Book Award金賞に選ばれました。

マーク・シュローダーは1974年、ルクセンブルク生まれ。2009年に写真家として活動を始めました。個人的な記録と視覚的な物語を組み合わせた長期プロジェクトを中心に制作しています。初期はポートレートを主に扱いましたが、近年は人の存在を間接的に示す手法へと展開。記憶、無常、個人が残す痕跡を主要なテーマとし、ルクセンブルク、リスボン、ベルリンを拠点に活動しています。

## Birgit Ludwig ビルギット・ルートヴィヒ

### *Antidotes*、2021—24 年

*Antidotes* は、ボスニア紛争の余波と、1996年に事故で亡くなった父の死に対するビルギット・ルートヴィヒの関心から生まれました。父は紛争終結時、国際機関に勤務していました。個人的な記憶と歴史的背景が交差する地点から、彼女はボスニア・ヘルツェゴビナをめぐる終わりのない旅を始めます。

Dayton 和平合意からほぼ30年を経た同国には、対立する記憶と未解決のトラウマがなお残ります。豊かな自然や文化的・宗教的共存の歴史は、民族的分断、歴史修正主義、戦争犯罪やジェノサイドの否認と隣り合わせにあります。*Antidotes* は、個人的な経験、風景、集合的な歴史を行き来しながら、紛争が現在に及ぼす影響と、記憶や癒やしの可能性を探ります。

ビルギット・ルートヴィヒはルクセンブルク出身で、ロンドンを拠点に活動しています。映像、写真、執筆を横断し、現実根差した表現に詩的な違和感を重ねながら、社会に広く共有された価値観や物語と向き合う個人の姿を探ります。

ルクセンブルク国立視聴覚センターの支援を受けた*Antidotes* は、2025年にサラエボのボスニア・ヘルツェゴビナ歴史博物館で発表されました。作品はNeimënsterやKonschthal Eschでも展示され、映像作品はRencontres Internationales Paris/Berlin、英国映画協会、ロンドンの現代美術協会で上映されています。ロンドンのキングストン大学で実験映画の修士号、ロンドン芸術大学セントラル・セント・マーチンズで美術の学士号を取得しています。